

素敵な人
みつけた!

みよし きらっと インタビュー

「弁護士」
つかだ さゆり
塚田 小百合さん



これまで女性の参画が少なかった法曹界でご活躍されている塚田小百合さんをご紹介します。町の住民相談をご担当いただいたこともあり、相談者からの信頼も厚い塚田さんは、鶴瀬駅前に事務所を構え、日々、問題解決に奔走されている若手弁護士です。

この仕事を選んだ理由

大学時代、ゼミや研究室で、弁護士と話をしたり、活動を見る機会が、たくさんありました。その頃、東京地方裁判所で、初の女性部長が誕生。その方は、私の学んでいた研究室の先輩だったのですが、生き生きと仕事の話をされる姿を見て、女性も長く続けられ、活躍できる世界として、魅力を感じました。

弁護士になって良かったこと、苦労したことについて

良い解決ができて、依頼者から、「先生にお願いして、本当に良かった。」といわれる時が、一番嬉しく思います。たくさんいる弁護士の中で、偶然にも、私を選び、託してください、納得していただける結果に導けた時は、本当に良かったなあと思っています。一方で、依頼の内容によっては、常に良い結果になるわけではありません。弁護士は、法的に可能な範囲で、依頼者にとって良い選択のお手伝いをするだけなので、証拠が不十分だったり、気持ちには分かるけれども法的には助けてあげられない場合もあります。それを理解いただくためには、苦労することもあります。

仕事に就いて感じたこと

弁護士は、人と人のトラブルの法的解決をお手伝いする職業です。決して前向きな仕事ではありません。いつも、事後的な紛争の処理であり、時代の先端を行く仕事でもなければ、人を前向きに、幸せにする仕事でもないような気がしていました。弁護士になって6年目になりましたが、最近、数年前の依頼者から、「今、幸せだなあと思う日々です。先生のおかげです。」なんていう手紙をいただくようになりました。以前は、その場の対応だけで精一杯でしたが、それがその後の依頼者の生活を、より良いものにするにつなげていたと感じたとき、自分の仕事に、少し意義を見出せるようになりました。



女性の権利や自立について感じていること

結婚して、1年半になります。結婚前は、家庭を持つたらし今までのように仕事はできない、一旦弁護士を辞めようと思った時期もありました。でも、自分のできる範囲でやってみよう、考えを切り替えてみたら、それなりに何とかかなるのです。女性として生まれた今の環境を、素直な気持ちで見渡してみると、意外と女性に対し暖かな配慮のある環境が生まれつつあるように思っています。やりたいことは、女性だからとあきらめないで、ちょっぴり貪欲に挑戦する、そんなところから、女性も生き生きと輝ける環境が生まれてくるのではないかと思います。

「伝統芸能《竹間沢里神楽》継承者」

まえだ さなえ こずえ
前田 早苗さん・小津江さん姉妹



竹間沢に伝わる里神楽・車人形は、百数十年の伝統を誇る三芳町の指定無形文化財、埼玉県有形民俗文化財です。これらの伝統芸能を代々伝える前田家に生まれ、姉妹で継承を続けている前田早苗さん、小津江さんをご紹介します。

*池上彩さんは、保存会の一員です。

里神楽・車人形について

私たちの先祖、前田筑前は、川越藩主のお抱え神楽師であったと言われています。神楽とは、神様に奉納するための歌舞で、祭りの季節になると各地の神社の祭礼で神楽舞が行われます。その神楽を代々継承していた前田左吉のもとに西多摩郡二宮村（現あきる野市）から「てい」が人形芝居用具を持って嫁入りしたことにより前田家に車人形が伝わりました。江戸時代安政年間（1854～1860）のことだそうです。車人形とは、文楽人形と同じ大きさの人形をろくろ車という箱車に腰かけた人が、一人で操る人形芝居です。現在、車人形という名称で残っているのは竹間沢を含めて、全国で3ヶ所だけということです。

やっていて良かったこと

私たちにとって貴重なことは、年齢層の幅広い「保存会」の方々の出会いです。公演が近くなると、週3～4日の練習をすることもあります。演出上の意見を出し合っていると、時には、熱いやり取りもありません。皆が親戚や家族のような雰囲気です。車人形や神楽のことに限らず、生活の智慧、習わし、年中行事など生活情報を教えてもらったり、悩みを聞いてもらうこともあって、本当にありがたい存在です。それともう一つ、上演後に舞台上で大きな拍手を頂けたときは、「良かったー」と感じる瞬間です。

伝統芸能を続けていく中での苦労や難しいと感じること

仕事をしながら、里神楽や車人形を続けているので、忙しい時期が集中し、両立が難しいと思うこともあります。また、親子でありながら、教えるを受けるときは、家元と弟子という立場になり、甘えてもらえないし、辛く感じることもあります。また、里神楽は、面を付けての舞なので、性別を意識することはありませんが、車人形は、15キロの人形を一人で動かす、1時間近くにも及ぶ演目をこなすので、女性の私たちに、体力的にきつい面があります。



今後の予定や続けていくことへの思い

この先、本格的に里神楽・車人形を受け継いでいく事に対しては、大きなプレッシャーを感じています。舞台は一人の力ではできない、人形を持って演じることだけではありません。私たちが、保存会の方々とともに自分たちの役割をきちんと果たしていくことが大切だと感じています。また、保存会は、もっと会員を増やしていくことが課題の一つです。今後、地域の方々や保存会の皆さんとともに、大切に守り伝えていきたいと思っています。興味をお持ちの方は、是非一度、公演をご覧になって頂ければ嬉しいです。そのときは…私たちの姿を探してみてくださいね。